

## 河井寛次郎の茶道論

### —— 制作的理念としての「作と用の浄土」の成立

浪波 利奈 (聖心女子大学)

本発表は、陶芸家・河井寛次郎(1890—1966)の茶道論を辿ることで、茶の湯に対する批判的評価が自身の作陶への省察と軌を一にしていたことを明らかにする。

陶磁器一般にかかわる河井の著述は1920年代から30年代、初期の活動期間に集中する。これは個人作家として独立後の間もない頃であり、民藝運動の黎明期にあたる。内容はいずれも、古作の作陶技術を主とした専門家・愛好家向けの解説である。その中には茶器や茶事に関する言及も多く含まれる。発表では初期の著作群より彼の茶道論を再構成する。

鎌倉時代以来の茶道について、「唐物」「高麗物」から美を見出すことに成功しながらも、新たに「和物」として美を創り出すことには失敗した、と河井は評する。つまり、審美眼には一定の評価を与えつつ、創作に対しては否定的見解を示した。この批評の結実として彼は自身の謂う「作と用の浄土」という制作上の理念に到った。発表では二つの相異なる河井の評価を検討し、これらに一貫する彼独自の価値基準を呈示する。

はじめに、陶磁器をめぐる故事に関して河井が指摘した問題点を整理する。「雨過天晴」の青磁をはじめ、釉薬誕生にまつわるフィクションは古今に存在する。それらに共通するのは、具体的な美的効果を志向して陶工が苦心の末、新たな技法を確立したとする筋書きである。ところが、古代近世では自然の諸要因を制御する窯業は未発達であり、焼成後の釉色や窯変はおしなべて人為の及ばない偶然に因る。この点を度外視して牽強付会した故事は、化学的知見を以て釉薬を調合する河井には首肯しがたいものだった。

次いで、和物の茶碗に対する河井の批判を確認する。茶人の指導による茶碗には、高麗物に倣って歪曲した作例や、故意に割った上で金継ぎを施した作例が少なくない。こうした作為的な造作に河井は「厭味」を看取り、美的効果への過剰な志向性に難色を示した。中でも長次郎や本阿弥光悦の楽茶碗を論じた彼の言説は、「人為」の範囲を明確にした点で重要である。

最後に、初期茶人が見出した器を手がかりに「民藝」にも通ずる理念へと河井が到った経緯について、柳宗悦(1889—1961)の他力思想からの影響を踏まえて考察する。唐物や高麗物の陶工は、銜わずとも実用を通じて救われる、謂わば「作と用の浄土」にいたことを河井は洞察した。同時に、大正期の近代的窯業という自らの出自ゆえに彼は、かかる「浄土」に達した古人との懸隔を自覚せざるを得なかった。以後、彼にとって作陶は「浄土」への廻向となった。

以上の議論より明らかになるのは、制作における夾雑物としての「人為」を論点に、河井が自身の作陶のあり方を模索したことである。茶陶や茶事上の極端な作為をめぐる批判と、化学技術を応用した作陶に対する自省とは表裏一体をなしていた。さらに民藝運動への参与がもたらした省察の深化は、爾後の作風の変容が証するところとなった。